

大腸癌研究会プロジェクト研究
『肛門管癌の病態解明と Staging に関する研究』
第 15 回会議議事録

《日時》2025 年 1 月 30 日（木）13:00-14:00

《会場》別府国際コンベンションセンター 1F フィルハーモニアホール

※会場と Web のハイブリッド形式

《出席者》

委員長：山田一隆

委員：池田公治（国立がん研究センター東病院）、石田文生（昭和大学横浜市北部病院）、井田在香（神奈川県立がんセンター）、伊藤芳紀（昭和大学）、上田和毅（近畿大学）、植村守（大阪大学）、碓井彰大（帝京大学ちば総合医療センター）、遠藤俊吾（福島県立医科大学会津医療センター）、大内晶（愛知県がんセンター）、大沼忍（東北大学）、岡村亮輔（京都大学）、小川真平（東京女子医科大学）、尾川諒太郎（近畿大学）、沖英次（九州大学）、小野智之（東北大学）、梶原由規（防衛医科大学校）、金子由香（東京女子医科大学）、河野眞吾（順天堂大学）、川村純一郎（近畿大学）、菊家健太（防衛医科大学校）、北原拓哉（愛知県がんセンター）、合志健一（久留米大学）、幸田圭史（帝京大学ちば総合医療センター）、神山篤史（東北大学）、小嶋基寛（国立がん研究センター先端医療開発センター）、小杉千弘（帝京大学ちば総合医療センター）、後藤健太郎（京都大学）、後藤諒介（新潟大学）、小林宏寿（帝京大学医学部附属溝口病院）、小森康司（愛知県がんセンター）、坂本一博（順天堂大学）、佐々木慎（日本赤十字社医療センター）、澤田紘幸（広島市民病院）、仕垣隆浩（久留米大学）、島村智（久留米大学）、杉本起一（順天堂大学）、須藤剛（山形県立中央病院）、諏訪雄亮（横浜市立大学附属市民総合医療センター）、曾田悠葵（防衛医科大学校）、竹原雄介（昭和大学横浜市北部病院）、塚田祐一郎（国立がん研究センター東病院）、塚本俊輔（国立がん研究センター中央病院）、所忠男（近畿大学）、富田尚裕（市立豊中病院）、中原健太（昭和大学横浜市北部病院）、南角哲俊（帝京大学医学部附属溝口病院）、野澤宏彰（東京大学）、長谷川誠司（済生会横浜市南部病院）、濱田円（近森病院）、肥田侯矢（京都大学）、廣瀬裕一（防衛医科大学校）、深瀬正彦（山形県立中央病院）、本多五奉（杏林大学）、松山貴俊（埼玉医科大学総合医療センター）、宮城良浩（琉球大学）、虫明寛行（済生会横浜市南部病院）、村井勇太（順天堂大学）、山内慎一（東京科学大学）、山口茂樹（東京女子医科大学）、山崎健太郎（静岡がんセンター）、山寺勝人（防衛医科大学校）、山本聖一郎（東海大学）、結城敏志（北海道大学）、吉敷智和（杏林大学）、吉満政義（広島市民病院）（計 65 名）

オブザーバー：阿部正（東京慈恵会医科大学）、安藤正恭（神戸大学）、石川聖（広島大学）、井上明星（滋賀医科大学）、大平学（千葉大学）、音羽泰則（神戸大学）、黒瀬洋平（福山市民病院）、佐村博範（浦添総合病院）、諏訪宏和（横須賀共済病院）、寺石文則（岡山大学病院）、中川聡史（医療イノベーション推進センター）、永田健（福岡大学）、成田和広（川崎幸病院）、裕彰一（周南記念病院）、廣川高久（刈谷豊田総合病院）、福長洋介（関西医科大学総合医療センター）、藤井敏之（周南記念病院）、藤島史喜（東北医科薬科大学）、松田健司（和歌山県立医科大学）、松田武（神戸大学）、松橋延壽（岐阜大学）、宮沢善夫（土庫病院 病理センター）、山城直嗣（浦添総合病院）（計 23 名）

【敬称略、50 音順】

《会議内容》

I) 議題 1. 「肛門管癌の病態解明と Staging に関する研究」進捗状況について

（1）第 15 回プロジェクト研究会議事について

委員長の山田より、第 15 回会議議事の確認を行った。

(2) 各施設における論文文化進捗状況について

当院研究分担医師の佐伯より、本プロジェクト研究において、代表施設からは 5 編の論文が雑誌に掲載されたことが報告された。

また、共同研究施設による副次研究に関して、5 題が雑誌に掲載されたことが報告された。さらに、論文文化中の 5 題の進捗状況について、2 題が投稿準備中、1 題が Revise 対応中、1 題が reject 後で投稿先検討中、1 題が執筆中であることが報告された。

(3) 本プロジェクト研究の成果

当院研究分担医師の佐伯より、本プロジェクト研究の成果として、論文文化された 10 題について各論文の概要が報告された。

1. 主解析論文: Characteristics of anal canal cancer in Japan, Yamada K, et al, Cancer Med, 2022; 11(14): 2735-2743

【概要】本研究参加の 47 施設より、1991～2015 年に診断された 1781 例の肛門管癌において、435 例の肛門管扁平上皮癌（SCC）症例を収集し、本邦の肛門管癌の特徴について解析した。本邦においては腺癌が高率で、SCC は低率であり、欧米やオーストラリアとは異なる結果であった。また、T4 で 5cm を超える腫瘍の予後は不良であり、T4 を「T4a:T4 で 5cm 以下」と「T4b : T4 で 5cm を超える」に細分類した方が実際の予後を反映していたため、大腸癌取り扱い規約第 10 版で改訂を予定している。

2. Prognosis of anal canal adenocarcinoma versus lower rectal adenocarcinoma in Japan: a propensity score matching study, Saiki Y, et al, Surg Today, 2022; 52(3): 420-430

【概要】全国大腸癌登録事業に 1991～2006 年に登録された肛門管腺癌症例のうち、不適例を除外した 390 例を下野直腸腺癌と比較することで、肛門管腺癌の特徴について解析した。肛門管腺癌は直腸腺癌と比べて、女性や高齢者に多く、肉眼型においては 5 型腫瘍が極端に多かった。また、組織型では低分化腺癌・粘液癌・印環細胞癌が多かった。更に、肛門管腺癌は直腸腺癌と比べて予後不良であり、肛門管腺癌は単径リンパ節転移が高率であることが特徴であった。

3. Characteristics of anal canal squamous cell carcinoma as an HPV-associated cancer in Japan, Yamada K, et al, Int J Clin Oncol, 2023; 28(3): 990-998

【概要】本プロジェクト研究の調査では、肛門管 SCC 症例に対する HPV 検査が 35/435 例（8.0%）にしかなかったため、当院 40 例と国立がん研究センター中央病院 47 例の肛門管 SCC を用いて HPV との関連性について調査したところ、国際的な報告と同様に、肛門管扁平上皮癌の HPV 陽性率は約 85%であり、遺伝子型 HPV 16 が最も高率であった。

また、いずれの Stage においても HPV 陰性例は陽性例と比較して予後不良であった。ただし、症例数が少なく有意差はなかった。

4. 特集：希少腫瘍の診断と治療 肛門管癌の診断と治療, 佐伯ら, 消化器外科, 2023; 46(9): 981-996

【概要】肛門癌で代表的な腫瘍（直腸型腺癌、肛門腺由来癌、Pagetoid spread を伴う腺癌、痔瘻癌および扁平上皮癌）の診断と治療について自験例を示しながら解説した。まれな腫瘍のため症例数が少なく、いまだ十分な治療法が確立されていない部分が多いため、さらなる症例の蓄積にて治療法が確立されることが望まれる。

5. The inguinal lymph nodes as regional lymph nodes in anal canal adenocarcinomas: A nationwide database analysis in Japan, Yamada K, et al, Surg Today, 2024; 54(12): 1505-1513

【概要】大腸癌取扱い規約第9版まで、肛門管腺癌における単径リンパ節は中間リンパ節とされているが、その妥当性について検討した。全国大腸癌登録事業に登録されている、1991～2006年に手術されたStage I～III 肛門管腺癌 346例を対象とした。各リンパ節領域の転移状況で分類すると、292LN 単独転移や傍直腸 LN・中間 LN および 292LN への転移例の予後は比較的良好であった。主 LN・側方 LN に転移している症例は、292LN や傍直腸 LN・中間 LN への転移によらず予後不良であった。これらの検討から、単径リンパ節は”中間リンパ節”として扱うのが妥当と考える。

6. Significance of Lateral Lymph Node Dissection in Squamous Cell Carcinoma of the Anal Canal: A Retrospective Cohort Study, Komori K, et al, Langenbeck's Archives of Surgery, 2024; 409(1): 157

【概要】現在、肛門管 SCC の標準治療は CRT であるが、以前は手術療法が行われていた。手術療法である側方郭清について多数例で検討した報告は大変少ない。本邦の肛門管 SCC に対する側方郭清の現状、意義、予後を明らかにするとともに、予防的側方郭清の効果について検討した。LLND を受けた患者のうち、病理組織学的所見が陽性であった患者は、陰性であった患者よりも無再発生存期間 (RFS) が悪かった。また、術前診断で側方リンパ節転移陰性例に対する予防的な LLND は、患者の予後に重要な寄与をしなかった。

7. Survival outcomes following salvage abdominoperineal resection for recurrent and persistent anal squamous cell carcinoma, Kitaguchi D, et al, European Journal of Surg Oncol, 2023; 49(9): 106929

【概要】CRT 後の再発/遺残病変に対する治療の第一選択は salvage APR であるが、再発と遺残では salvage APR 後の長期成績が異なる、との報告があるため、本邦における再発病変と遺残病変に対する salvage APR の意義について検討した。遺残病変を有する患者に対する salvage APR 後の予後は、再発病変を有する患者よりも有意に不良であった。また、再発症例では、salvage APR によって予後の有意な改善が認められたが、遺残病変では認められなかった。したがって、遺残病変に対する salvage APR の追加的な有益性は示されなかった。

8. Local excision versus radical surgery for anal squamous cell carcinoma -a multicenter study in Japan-, Murai S, et al, Int J Clin Oncol, 2024; 29(6): 813-821

【概要】現在、肛門管癌の NCCN ガイドラインでは、ごく早期 (cT1N0) の肛門周囲皮膚病変のみ局所切除の適応となっているが、より進行した病変 (cT2N0) についても局所切除が許容できるのか否か、検討した。cTis-2N0 肛門扁平上皮癌において、local excision を施行した場合、再発したとしても局所再発が多く、サルベージ治療が可能であるため、local excision は治療の選択肢として考慮され得る。ただし、筋層への浸潤を認める症例では local excision を施行した場合に再発リスクが高く、local excision を行い、筋層浸潤が判明した場合には密なサーベイランスを行う、または、追加治療を検討することが重要と考えられる。

9. Clinicopathologic factors associated with prognosis in patients with metastatic squamous cell carcinoma of the anal canal: A multicenter cohort study, Matsuyama T, et al, Journal of the Anus, Rectum and Colon, 2024; 8(3): 163-170

【概要】肛門管扁平上皮癌の遠隔転移について、その臨床病理学的特徴と予後に関する因子について検討した。同時性遠隔転移の中で複数臓器転移は単独臓器の転移と比較して予後が悪かった。また、異時性遠隔転移では早期再発群 (治療後 18 ヶ月以内) が独立した予後不良因子であった。

10. Metastatic status and dissection effect of regional/extraregional lymph nodes in Japanese patients with squamous cell carcinoma of the anal canal: a multicenter retrospective cohort study, Torigoe T, et al, Journal of the Anus, Rectum and Colon, 2025; 9(1): 33-40

【概要】現在、CRT が標準治療である肛門管 SCC において、手術標本から腫瘍浸潤の深さやリンパ節の状態を病理学的に評価することは困難になっている。今回、大規模臨床研究によって収集されたデータから、病理学的検索による深達度、リンパ節転移、予後との関連について検討した。

UICC TNM 分類第 8 版によると、252/253LN は領域外リンパ節に分類されるが、外科的治療と CRT の両方を含め、これらのリンパ節に向けた積極的な治療アプローチが予後改善に寄与する可能性が示唆された。

(4) 研究終了について

委員長の山田より、本プロジェクト研究の終了について報告された。

今回で 8 年間続いた本プロジェクト研究の最後の会議となる。これまで肛門管癌に関する論文は非常に少なかったが、多くの施設の協力により現時点で、先ほど佐伯から報告した 10 題が論文化された。

研究は終了するが、現在投稿を行っている施設においては、引き続き論文化を目指してもらいたい。

文責：山田 一隆